

夏休み子どもワークショップ

「世界中の仲間といっしょに」

— 関西国際センター研修参加者と小学生を対象とした国際理解ワークショップ
の実践記録 —

今井寿枝・品川直美・野畑理佳

1. はじめに

国際交流基金関西国際センター（以下KC）では、年に数回、KCの研修参加者が近隣の小学校等を訪問し子どもたちと交流するという事業を行っている。これは、KCを地域に対して開かれたものにするための取り組みの一環である。このような交流は、KCの研修参加者にとっては日本の教育現場を見学することで日本社会への理解を深め、地域に暮らす子どもたちと日本語でコミュニケーションを行う貴重な機会となっている。また子どもたちにとっては、研修参加者の多様な文化に触れることで、異文化への興味・理解を深める機会となっている。

交流の内容はKCの担当者と交流先の担当教諭が事前に打ち合わせを行った上で決定されるが、これまでは研修参加者が学校へゲストとして招かれ、互いに国の遊び・食べ物・歌を紹介する、文化体験をする等の活動を行うことが多かった。このような活動も国際理解教育の一つの方法として有効であることは間違いないが、そこからもたらされるものはお互いの国を「知る」というレベルに止まってしまう感がある。一度限りの短時間の交流であっても、「知る」を超え、さらに一歩踏み込んだものにできないか。そのためには、研修参加者から子ども、子どもから研修参加者という一方向のベクトルではなく、共に手を取りあい一つの目的に向かう「協働」の過程が必要ではないだろうか。そこで、KCでは研修参加者と子どもたちが体験を共有し協働する過程で、多様性に気づき、共感し、共に創造する楽しさを感じることによって国際理解の感覚を得られるような場を提供することを目指し、小学生（高学年）を対象とした「夏休み子どもワークショップ」を企画・実施した。小稿では、KCによる初の試みである、このワークショップの実践について報告する。

2. 夏休み子どもワークショップの概要

ワークショップは、テーマを「世界中の仲間といっしょに：第1回 いろんな国の文字であそぼう！」とし、2008年7月26日（土）13：30～16：30にKCのホールで実施した。以下、開

催の趣旨と内容について述べる。

2.1 趣旨

ワークショップの主なねらいは次の2点である。

- (1) 地域に対して、通常の学校交流とは異なる方法で、KCの研修参加者と子どもたちを対象とした国際理解教育の機会を提供する。
- (2) KCスタッフと小学校教諭等との協働による運営を目指すことで、運営者間の相互理解を深め、通常の学校交流に生かすことのできる新たな視点を提供する。

(1)のねらいに向けては、次のような点を考慮した。まず、今回は研修参加者が小学校を訪問するのではなく、参加を希望する小学生がKCに来るという形で実施した。これにより、小学生同士も初対面となり、「日本の小学生」対「外国からの研修参加者」という二項対立の図式にならず、多様な背景を持った小学生と研修参加者それぞれが自文化・他文化を相対的に感じ、相互理解を深められる場とすることを目指した。また、言語教育機関であり多国籍の研修参加者がいるというKCの特徴が生かされるよう、ワークショップのテーマは「言語」の周辺を扱うこととし、今回は「文字」を選定した。同時に、研修参加者と子どもたち、研修参加者同士の日本語能力の差にも配慮し、ワークショップにおける活動は、言語の周辺を扱うものでありながらも言語に依りすぎないように留意した。さらに、「コラボレーションによって新しい文化を創造する」という国際交流基金のコンセプトに合致するよう、「創造」の場を取り込んだものにした。

(2)については、ワークショップの実践をその場限りのものとせず、その後の学校交流に生かしていくためには小学校教諭等との協働も不可欠であると考え、KCとの交流実績のある小学校の先生方に運営への協力を依頼し、計画段階から助言をいただく形で関わっていただいた。

2.2 参加者

小学生についてはKCのホームページや市報等にワークショップの案内を掲載するとともに、近隣の小学校、公民館、図書館へちらしを配布し参加者を募集した。KC研修参加者については、ワークショップ開催時期に行われていた研究者・大学院生日本語研修2ヶ月コースに参加中の研修参加者から希望者を募った。その結果、小学校5・6年生は11校23名（男子8名、女子15名）、KC研修参加者は13ヶ国18名（男性2名、女性16名）が参加することとなった。

2.3 運営スタッフ

企画・運営はKCの日本語教育専門員および職員が中心に行ったが、先に述べたように、今回のワークショップを次に繋げられるよう小学校教諭にも協力を呼びかけ、趣旨説明を行った

夏休み子どもワークショップ「世界中の仲間といっしょに」

上で3名に運営に関わっていただいた。また、これらの運営スタッフと子どもたちとの世代差を埋める役割も必要であると考え、KCのインターンとして来ていた大学院生と大学生の協力も得た。

2.4 ワークショップの流れ

ワークショップ全体の流れを表1に示す。流れは「1.アイスブレイク（ほぐす・慣れる）、

表1 ワークショップの流れ

0. オープニング	5分	目標・スケジュール等の説明。文字に関するクイズ。
1. アイスブレイク		
1.1 ひっつきゲーム	10分	体を動かしてリラックスする。 ファシリテーターが言う人数のグループを素早く作る。 例) ファシリテーターが「5」と言う。→5人のグループを作る。 小学生と研修参加者の混合グループになることを条件とする。
1.2 名前の文字集め競争	12分	グループとしての一体感を持つ。文字の多様性を知る。 いろいろな文字で書かれた自分の名前をできるだけ多く集める競争。制限時間内に自分の名前を異なる言語の文字で書いてもらい、その数を活動2以降を共に行うグループのメンバーで合計し、多さを競う。名前は、研修参加者同士でも書き合う。
2. 知り合う		
2.1 文字を書いてみよう!	15分	グループ内の関係を築く。異なる文字文化への関心を深める。 グループで集まり、自分の名前をグループメンバーの母語の文字で実際に書いてみる。
2.2 どんな人かな?	10分	互いに個の文化に対する興味・関心を深める。 趣味と好きな漢字を一つずつシートに書き、それを見せながら自分の趣味や日本語・文字の学習経験について紹介する。持参した文字表や文字練習帳があれば見せ合う。(持参するよう事前に連絡した。)
2.3 こんなとき何て言う?	10分	文字・表現の多様性や共通点に気づく。 サッカーゴールを決めた瞬間、びっくり箱を開けた瞬間の2種類の絵を見て、それぞれの時に自分ならどんな言葉を発するかを書き、紹介する。
休憩		
3. いっしょにつくる		
3.1 どんなイメージ?	20分	イメージの共通性や違いを知る。(活動3.2のためのブレインストーミング) 「夏」をテーマとし、連想する六つの言葉をシートに書き、結果を共有し、互いの習慣や文化について話し合う。
3.2 砂で文字や絵を描こう!	50分	協働で新しいものを創り出す楽しさを感じる。(協働・創造を目指した活動) 3.1で共有した「夏」のイメージを、色砂を使って作品に仕上げる。手順①グループの1人が「夏」という文字を自分の国の言葉で書く。②順番に「夏」のイメージの文字や絵を描いていく。この時、他の人がかいた文字(絵)を使って新しい文字(絵)をかく等の意識を持つ。(写真1・2参照)
4. 振り返る		
4.1 どんなのできた?	15分	同一のテーマのもとに生まれた様々な作品を見て、多様性を感じる。 各チームで作った作品を紹介・鑑賞する。
4.2 仲間といっしょにしたこと	5分	活動を振り返り、自分の気持ちの変化や仲間との心のつながりを感じる。 ワークショップ中に撮影した写真を流れの順にスライドショーで見ながら振り返る。スライドショーの中に振り返りを促す短いフレーズの問いかけがある。
4.3 振り返りシート・アンケート記入	10分	自分の気持ちの変化と向き合う。 ワークショップの感想および自分の気持ちの変化・発見などについて書く。ワークショップのアンケートに回答する。

2. 知り合う (知る・楽しむ・驚く・共感する)、3. いっしょにつくる (協働・創造する)、4. 振り返る」の4段階に分かれる。このうち、研修参加者と子どもたちによる「協働・創造の過程」が、趣旨(1)に鑑み最も重要となる (表1、活動3.2)。ここでは、参加者が「夏」というテーマから連想した文字(言葉)や絵を、色砂を使って書き、作品として完成させるという活動を行った。順番にそれぞれが思い描くものを表現していく過程においてグループ内で話し合いが生まれ、創造する過程が共有される。この活動に参加者が自然に取り組み、そこに至るまでの活動の内容を工夫した。表1の枠で囲んだ部分が各活動の意図である。また、文字の多様性を切り口とし、参加者が互いのことに関心を持ち、国籍や年齢が異なっても共通点があることに気づいたり、背景の異なる人たちとも手を取り合い一つのゴールに向かっていく楽しさが体感できるようなデザインを目指した。さらに、小学生の集中力が維持されるように、一つ一つの活動の時間を短くし、テンポよく進められるようにした。

2.5 活動中の様子：「協働・創造を目指した活動」の事例

参加者の間では実際にどのように交流が展開していたのか、ここでは紙幅の都合上、「協働・創造を目指した活動」の事例に絞り、2枚の写真をあげて簡単に紹介する⁽¹⁾。



写真1：「3.2 砂で文字や絵を描こう！」の活動風景

この活動をする時点で、グループ内の関係がどのようにできあがっているかが異なるため、活動の進み方はグループにより様々だった。例えば、何を書けばいいかわからないという小学生が、研修参加者に活動2.2で好きだと言った漢字を書いたら？と勧められ、嬉しそうにその漢字を書くような光景も見られた。また、色砂を混ぜたり砂を払ったりする作業はどのグループでも皆で助け合っていた。



写真2：「3.2 砂で文字や絵を描こう！」で創造されたもの

小学生Aがインドの言葉で書いて欲しいとリクエストし→インド人研修参加者がヒンディー語の文字で「夏」と大きく書き→小学生Bが「なみ」を書き→中国人研修参加者が波間に見える「魚」を中国語の文字で書いた→小学生Cが「つり」と書き、「り」を伸ばして「魚」に繋げた (この小学生は自分の趣味を話す活動の中で、趣味が釣りだと話していた)。→クロアチア人研修参加者がクロアチア語の文字で「太陽」と書き→小学生Dが波の打ち寄せる「はま」を絵と文字で描いた。→研修参加者は「はま」が理解できなかったが、小学生Bがジェスチャーを交え漢字を書くなどして説明した。→最後に、小学生Aが花火を描いて仕上がった。

3. ワークショップの評価

3.1 参加者（小学生・研修参加者）による評価

小学生と研修参加者に対して行ったアンケートの結果を表2に示す。アンケートはワークショップの趣旨(1)に関する質問項目を三つ挙げ、4件法で行った。質問の表現は小学生、研修参加者に合わせて変えた。この結果からワークショップは小学生・研修参加者共に好評であったと言える。

表2 アンケート結果

質問項目	小学生（23名）				研修参加者（18名）			
	1	2	3	4	1	2	3	4
①文字・人の多様性を感じたか	23 (100%)	0	0	0	17 (94.4%)	1 (5.6%)	0	0
②協働・創作作業の楽しさを感じたか	23 (100%)	0	0	0	18 (100%)	0	0	0
③ワークショップ全体に対する満足度	22 (95.7%)	1 (4.3%)	0	0	15 (83.3%)	3 (16.7%)	0	0

※質問①②については、「1：とても感じた、2：まあ感じた、3：あまり感じなかった、4：ぜんぜん感じなかった」、また、質問③については、「1：とても満足、2：まあ満足、3：少し不満、4：とても不満」の4件法で回答。

3.1.1 小学生

振り返りシート（表1、4.3）の記述内容を見ると、「参加する前はどきどきだったけど、参加してみるととてもおもしろかった。」「このワークショップに参加する前はいやだなあと感じていたけれど、参加すると楽しかった。」といったコメントが挙げられており、気持ちの変化があったことがわかった。小学生を対象としたワークショップでは親が申し込んだので来たというケースも多く、今回も小学生自身の動機がさほど高くない子どもも見受けられたが、ワークショップ終了後、参加してよかったという肯定的な気持ちに変化した子どもが多かった。

また、「世界にはいろんな文字があって、似ていても一方の国では全然使わない文字もあっておもしろいなと思った。」「国が違ってても考えが同じだったとき、うれしかった。いろんな表現があっておもしろかった。」等、多様性を知った、多様な中にも共通点を発見したという体験を喜びとして受け止めた子どももいた。さらに、「外国のことや、他の小学校の人たちはどんなことが好きなのかがよくわかった。」という記述からは、外国対日本の二項対立で捉えず、世界の多様性だけでなく日本の中にある個の多様性も感じていたことが窺える。協働・創造を目指した活動についても、「みんなといろいろするのがすごく楽しかったからよかったと思う。」「自分にとってよかったことはみんなで協力できたこと」といった記述があった。

3.1.2 研修参加者

研修参加者からも「いろいろな世界の話と文化はとても面白いです。」「どんな国でも小学生はやはり同じですね。まずはずかしくてしずかにしていたけど、友達になったあとおもしろかった。」という記述からわかるように、多様性と共通性の両者に対する気づきがあった。また、「前：文字、絵画は難しいと思う。後：みんなの協力であんまり難しくない。」のように協働・創造を目指した活動が持つ力を感じた者もいた。さらに、「絵と文字で違う国の人の間に交流の橋をわたしました。」「外国語をもっと勉強したほうがいいと思いました。」など、ワークショップに参加することで、自分自身の意義や課題を見出した者もいた。

3.2 運営スタッフによる評価

運営スタッフにもアンケートを実施するとともに反省会を行い、ワークショップを振り返ったが、ねらいは概ね達成されたという共通の認識が得られた。また、小学校教諭からは、今回の体験の評価を周囲に伝えていきたいとの声が聞かれた。ワークショップを今後の学校交流に生かすための新たな一歩を踏み出すことができたと言えよう。実際、現時点での学校交流への応募数は昨年度より増えており、運営スタッフであった小学校教諭の所属する小学校からも応募があった。

ワークショップを企画・運営する過程で、KCスタッフは、小学生への声かけの仕方や関わり方、小学生の作業スピードなどについて小学校教諭から多くのアドバイスをいただいた。また、「KCという場所で」、「1校ではなく様々な学校から小学生が集まって」交流を行ったことについては、小学生がいつもとは違う異文化の空間・人間関係においてワークショップに参加することで自身の新しい一面を発見する可能性に繋がるといったコメントもあり、通常の学校交流とは異なるKCという「場」で行うことの意義に関して新たな示唆が得られた。一方、小学校教諭からはワークショップの進行の仕方やスライドショーを使った振り返り等、活動の工夫について学ぶことができたとのコメントがあった。このように、運営スタッフの側も、ワークショップを実施するという一つの目的に向かう過程で通常の学校交流よりさらに相互理解を深めることができたように思われる。

しかし、子どもを対象とするワークショップを行うのは初めてだったこともあり、その内容や運営方法については反省すべき点も挙げられた。活動で使ったワークシートのわかりにくさの問題や、グループ活動時のファシリテーターとしての介入の仕方、チラシに使用する言葉や広報の仕方、小学生の保護者の巻き込み方など様々である。また、準備段階においてKC内で運営体制を十分に整えられなかったことから生じた問題もある。これらの課題は、今回の経験を踏まえて改善していかなければならない。

4. おわりに

参加者および運営スタッフへのアンケート結果等から、今回のワークショップはその二つの趣旨を概ね達成することができたと言えるだろう。運営にご協力いただいた小学校教諭からは今回のようなワークショップの継続開催を求める声があがった。今後も、KCの特色を生かした交流のあり方を考え、小学校教諭等との協働の関係を築きつつ国際理解教育の実践を蓄積し、そのノウハウを提供できる機関として近隣地域へ貢献することを目指していきたい。

謝辞

ワークショップ運営にあたっては、佐々木理江先生（泉佐野市立佐野台小学校）、奥重子先生（泉佐野市立長坂小学校）、佐東ひろみ先生（貝塚市立津田小学校）、黒田知加さん（鳥取大学）、俵和也さん（立命館大学）に多大なるご協力をいただきました。

また、中山京子先生（京都ノートルダム女子大学）、笠松和寿先生（泉佐野市立上之郷小学校）には企画・準備段階で貴重なご助言とあたたかい励ましのお言葉をいただきました。この場を借りて、感謝の意を表したいと思います。

〔注〕

⁽¹⁾他の活動風景については、KCのホームページでの報告を参照されたい。

〈http://www.jpfi.go.jp/j/kansai/exchange/j_cws_01.html〉

〔参考文献〕

佐藤郡衛（2006）『「共に生きる子ども」を育てる国際理解教育』教育出版株式会社

森泉哲（2000）「異文化・グローバル教育における教育活動—多文化交流プログラムの活動を通して—」『名古屋女子商科短期大学経営研究所年報』第12号、83-92